

田植えで「国際交流」

甘楽町の水田で9日、国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊員の技能研修を受け入れているNPO法人「自然塾寺子屋」主催の田植えが行われた。アフリカから日本に研修に来ている農業普及員など約100人が参加。13畝の水田で、泥まみれになりながら、3、4本ずつ等間隔に苗を植えた。写真。



田植えは、自然塾が毎年行っている恒例行事。もともと農作放棄地だった水田を復活させ、「普

段食べているお米が作られる現場を知ってほしい」と始めた。作業後はバーベキューを開き、地元の人々が握ったおにぎりや郷土料理を食べながら談笑する交流の場にもなっている。

この日は、JICAの事業の一環で来日したエチオピア、ウガンダなどアフリカ7カ国の農業普及員8人も参加。市場でどんな作物が売れるかを

アフリカの研修生ら100人、泥まみれ



カ月間の研修を受けている。普及員は自然塾の案内で、県内の農協などを1週間視察し、田植えに参加した。

ジンバブエから訪れたエディン・シンガイ・チンベラさん(39)は「母国ではお米を作っていないので、初めての体験。甘楽町は山に囲まれ、いい

自然が残っている。地域の人々が温かく迎えてくれ、昔から知っている仲間会えたよううれしかった」と話した。

田植えを主催した自然塾は、2001年に任意団体として発足。以来、農家に研修生を受け入れてもらうなど地域の助けを得て国際協力に尽力してきた。

設立者の矢島亮一代表(53)も青年海外協力隊のOBだ。当時派遣されたパナマの農村で村落開発に携わり、農業の魅力を再認識したという。矢島さんは、「田植えをしてバーベキューをする。田舎でもできるのではなく、『田舎だから』できること。甘楽町にとどまらず、富岡、下仁田、さらには県内全域で、国際交流の輪を広げていきたい」と語った。

【神内亜美】